



寺町には豪商が競って寄進した寺社建築と歴史があります。「北の守り」といわれた類焼を防ぐ町並を巡ります。

酒田商工会議所

①中央公園 昭和51年の酒田大火後、地下駐車場の上に建設された公園。階段を上り寺町を眺めると風情があります。



②天満宮 酒田大火で焼失。昭和54年10月再建。学問の神様菅原道真公を祀る社。お箸塚、草木塔、宝篋印塔半肉双塔(ほうきょういんとうはんにくそうとう)の珍しい石塔があります。元禄3年、ここに時鐘をおき時を知らせました。鐘は名工国松吉右工門の作。市指定文化財。



談議所門前 龍巖寺前通り。江戸時代、龍巖寺は談議所として格式を誇りました。龍巖寺仁王門前と浄福寺唐門前と下日枝神社隨身門前を門前と呼びました。

③龍巖寺境内 仁王門と板碑 昔から仁王門があり、現在の仁王様は大正時代のもの。板碑は石の素材から南北朝と推定、阿弥陀三尊の種子(しゅじ)が刻まれています。酒田初期の歴史を知る貴重な資料とみられ、生石延命寺、鷹尾山にもあり天道信仰に関係があるようです。



青物小路 安祥寺前通りから柳小路への一角。八百屋渡世の人が多く、腐った青物を捨ててあったことから「くせ小路」とも呼ばれました。

林昌寺小路 寛永元年以前、林昌寺があった上の山をいいます。その後、移転し内匠町から寺町角までを呼んだ時代もありました。

祖父山 妙法寺の防砂風対策で人工的に出来た砂山。酒田駅の建設で地ならしの為に山が削られました。

雷小路 旧鍛冶町通り北角から十王堂町角辺まで。大きな雷が落ちたからか?

浄土町 旧十王堂町が訛って「ジョウド町」。寺町の雰囲気もあり、訛りに浄土と漢字が当てられています。

④酒田山 龍巖寺 真言宗智山派のお寺で開山は文明年間(1469~1487)。火災で焼失。宝暦元年(1751)は本間家、寛政10年(1799)は酒井家より寄進を頂き再建。多くの寄進は元禄11年より「談議所」という学問の中心寺で亀ヶ崎城の祈願所だったからです。酒井家への年始登城の際は「龍巖寺 参上、開門」で門が開き、二の丸門まで大名駕籠で通され、黒書院において杯頂戴・御返杯の格式があり、龍巖寺不参のうちは城内の門は開きませんでした。その時の大名駕籠、文明四年(1472)以前の修復された曼陀羅、芭蕉二百年忌の句会、700年~800年程前の観音様がいます。日枝神社が鎮守社となる1603年以前、鎮守社は浅間神社で、1601年に焼失した際、ご本尊「木花之開耶姫」石像(室町時代)を預かりました。本尊の木瓜の紋は京都仁和寺の紋と同じ紋で酒田発祥伝説の一つです。



この地図は大正末期の酒田市街

⑥東永山 泉流寺 曹洞宗のお寺で、創建は、文亀年間(1501~1504)。本間光丘が明和元年に徳尼公の像を作り、寛政2年徳尼公廟を寄進。昭和14年に三十六人衆之碑が建立。酒田発祥伝説が祀られています。市有形民俗文化財。



⑦亀崎山 浄福寺 真宗大谷派のお寺で、開山は文明7年(1475)。本間光丘が寛政12年(1800)に京都近江の大工を呼び寄せて造らせた総ケヤキ造りの「四脚向唐門」を寄進。大地震に倒壊せず、市指定文化財。本間家、伊藤家の菩提寺で代々墓があります。



⑧河雲山 海晏寺 曹洞宗のお寺で、開山は応永元年(1394)。本間光丘が寛政9年輪藏、釈迦堂を寄進しました。京都で作らせ海路で運び、345両の支払いだったと言われています。平成11年建立の三重塔は高さ30mで伝統建築を継承したものです。



⑨珠林山 正徳寺 曹洞宗のお寺で、開山は長禄2年(1458)。参道に珍しい「女人成佛塔」とユーモラスなお顔立ちの千手観音、如意輪観音、聖観音が並んでいます。一銭地藏の謂われ、宝篋印塔の飢饉の歴史など興味深いです。



⑩十王堂 酒田大火で焼失しなかった唯一のお堂。極楽浄土信仰で冥土で亡者の罪を裁く十人の判官をお祀りしています。えんま大王の中に本尊の小さいえんま大王が入っていて、恐い奪衣婆がにらんでいます。



参考文献 酒田市作成の資料、ガイドブック  
「酒田の石造文化」荘司芳雄氏著作  
「酒田の伝説と伝承」さかた風土記田村寛三氏著作

⑤本長山 妙法寺 法華宗のお寺で開山は応仁元年(1467)。類焼を恐れ、元禄11年(1698)酒井家より約3万坪を借りて現在の地に移転。酒井家の准菩提寺になり酒井家の裏紋を頂いて寺紋としました。広大な砂丘地で、西北に糞垣を作らせ風砂を防ぎました。それが祖父山を作りました。参道はさかたセントラルホテル側から始まり、うっそうとした「切り通し」を抜け、右手に妙法寺公園の「三烈士之碑」。境内に能登より植林した庄内クロマツの元祖の大木、桜、松掛の藤、蓮池があります。歴代住職が境内を浄土のようにして人々の幸福に尽くそうと心がけてきました。酒田十景の「妙法寺鐘」、「七曲山開運稲荷神社」、「伊東不玉の墓」、「柿崎孫兵衛の墓」があり、「子産せ(こなさせ)の松」「妙法寺の幽霊」などの伝説が残っています。



## 「酒田伝説と伝承」 田村寛三氏著作より抜粋

### 「火災を予見した龍巖寺の仁王さま」

ある朝起きてみると、仁王様が両方とも西の方へ向いている。おかしいと思って元に通りに直すが、次の日になると西の方を向いている。こんなことが三日四日続いたので、近くの人には不思議に思い「みこど」にお伺いを立てたところ、「それは西の方から火災が起きるから注意せよ、との御注意だ」とのお告げである。町の人達は、このお告げを伝え合って火災に備えていたら、数日後西の方から大きな火災が起こったが、龍巖寺近くの人はいかなくて、仁王様が再び西の方を向いて睨んでくれたので火勢も恐れをなし、難をのがれた。

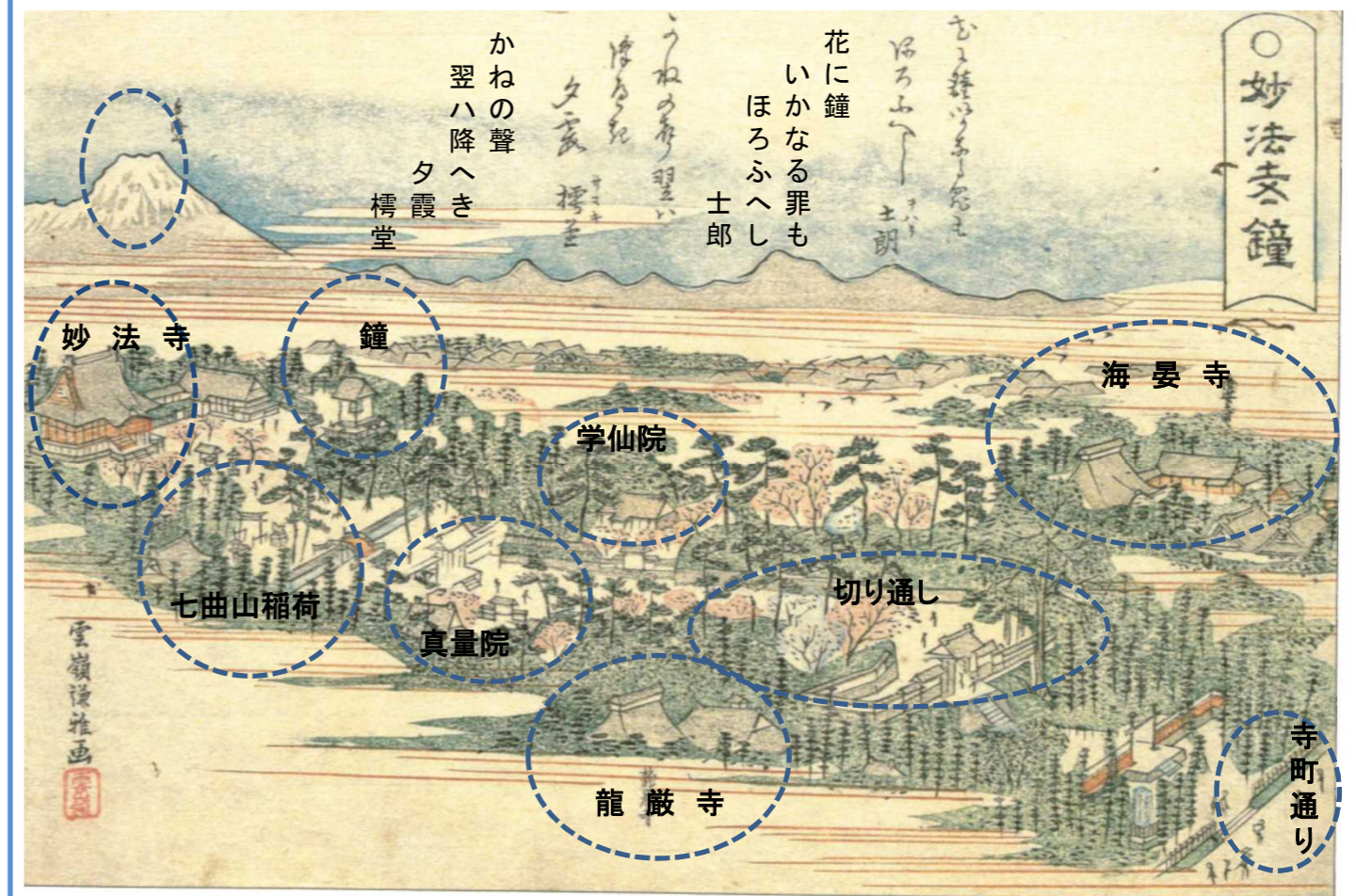
### 「妙法寺の子産せ(こなさせ)の松」

妙法寺の本堂前に大きな黒松があり、囲いがされていて、中に小さなホコラが祀られている。この大木は日永上人がここに移ってきて防砂の植林をしたときの一番古い松だと思われる。昔から「油こぼし子産せの松」とよばれ、子授けや安産の松として知られ、妊婦や若い夫婦連れが夜更けてから参詣する者が絶えなかった。江戸時代、この妙法寺を逢引きの場にしていた若い男女がいた。人目をしのんでいたが、ついに娘のお腹が大きくなり、悩んだ娘は死ぬしかない、この松の木で首を吊ろうとした。そこへ油売りのお婆さんが通りかかり、腰紐を自分の首にかけ、首吊りの見本を教えてあげようとしたその時、油壺がころがり、そのまま首を吊って死んでしまった。それを見てびっくりした娘は油にまみれながら元気な男の子を産んだ。(お婆さんが男の人の話もあり)もう一つの話では、明治27年の大地震の時、津波を恐れた人々は高地の妙法寺に大勢逃れてきて、臨月の女性がこの松に寄りかかりながら子供を産んだと言う話もあります。

### 「十王堂のえんまさん」

十王堂のえんまさまは大きいえんまさんの腹の中に入っている、小さい方が本尊である。昔、十王堂町の与惣右工門が海を歩いていると、「与惣右工門、与惣右工門」と呼ぶものがいるので、振り返るとこのえんま像が流れついていた。これを自宅に安置していたが、「ここは嫌だからお堂を建てて祀って欲しい」というので、近所の人と相談してお堂を建てた。

## 酒田十景「妙法寺鐘」



酒田十景とは

「さかたみやげ」として江戸時代の文久年間(1861~1864)に酒田の風景に宣伝文をつけ絵葉書のように売り出されたものです。版元は本町一丁目、五十嵐仁左衛門。町絵師の五十嵐雲嶺謙雅が描きました。版木十枚は本間美術館に現在保存されています。「妙法寺鐘」はその一枚で、昔の寺参りは娯楽の一つで、桜の名所だった妙法寺には多くの人々が訪れました。この鐘の音は、余程良い音色だったのでしょうか。鳥海山には雪が残り、桜が咲いているので、この季節は春ではないだろうかと推察するのですが、どうでしょう。いろいろ想像してみると楽しいです。○は現在もそのまま存在しています。



明暦2年(1656)もっとも古い酒田町絵図にみる寺町

法泉院は龍巖寺のことです。妙法寺も寺町沿いにあり敷地も小さいです。移転した寺社の当時の場所もわかり、年配の人が使う林昌寺小路、善導寺小路、持地院小路、五大院坂(天満宮)の由来もわかります。



昭和初期 妙法寺境内七曲山稲荷神社



この鐘楼への階段はカギ型に角があります。妙法寺の稲荷神社は、七回曲がって上ったので七曲山稲荷と名付けられたそうです。こんなふうな七回曲がっていたのでしょうか？

昭和初期 停車場近傍名勝妙法寺鐘